地域研究委員会人類学分科会
（第２３期・第１回）

議 事 次 第

１．会 議 名　　地域研究委員会人類学分科会（第２３期・第１回）

２．日　　時　　平成２７年１月１２日（月）１６時００分～１８時００分

３．場　　所　　東京外国語大学本郷サテライト７階会議室

４．議　　題　（１）委員長、副委員長、幹事の決定について
　　（２）今期の計画について
　　（３）その他

５．資　　料　（１）設置提案書
　　（２）委員名簿

地域研究委員会人類学分科会(第２３期・第１回)

日時　平成２７年１月１２日(月)　１６時００分～１８時００分
会場　東京外国語大学本郷サテライト７階会議室
　　(〒113-0033　東京都文京区本郷 2-14-10)
出席　　窪田、宮崎、稲村、岩本、太田、鏡味、斎藤、菅、竹沢、中谷、馬場、速水、松田、三尾、山本、鈴木、高倉(ｽｶｲﾌﾟ参加)　(17 名)
欠席　　梶、山極、岸上、小泉、小長谷、杉本、曽我、森山　(8 名)(敬称略)

議題
１　委員長、副委員長、幹事の決定について
　委員長　　窪田 幸子
　副委員長　宮崎 恒二
　幹事　　高倉 浩樹、速水 洋子
　以上の通り、決定した。

２　分科会委員の追加と訂正について
　名簿の訂正：岸上伸啓　「人間文化研究機構国立民族学博物館教授」
　　杉本良男「杉本良夫→良男」
　分科会委員の追加：鈴木正崇(連携会員)　慶応大学文学部教授（2 月幹事会へ・3 月発令予定)

３　今期の計画について
前期の活動内容を踏まえて今期は、まず、前期策定した参照基準をもとに、高等教育におけるグローバル人材育成の要請に、文化人類学としてどのように関与できるかを考えることを、確認した。

４　その他
分科会の名称を「文化人類学分科会」とすることを検討することで合意した。
次回：4 月 11 日午後あるいは 12 日に開催を予定。

グローバル人材育成と文化人類学参照基準

2015 年 4 月 11 日

日本学術会議文化人類学分科会

文責：鏡味治也（金沢大学）

Ⅰ　【文化人類学参照基準】から抜粋

２　文化人類学の定義

人類学は世界中に住む人間の多様性と共通性を考察の対象とし、全体的な把握と比較の観点を根拠としつつ、批判的で内省的な研究を目指している。
文化人類学は、「参与観察」の手法を用いた現地での長期にわたる調査（フィールドワーク）に基づいて、ひとつの社会の人びとの生活のあらゆる側面を全体的（ホーリスティック）に把握しようとする民族誌的研究と、それらを世界規模で比較して共通点と差異を見いだし、それぞれの文化の特性を浮かび上がらせる文化間比較を、研究の両輪として展開してきた。そうした研究が明らかにした文化の多様性は、人間を理解する上で欠かせない観点として文化人類学が提示してきたものであり、異なる文化を先入観にとらわれることなく把握する手段として提唱してきたのが文化相対主義である。

３　文化人類学固有の特性

文化人類学者は、国策やナショナリズムや宗教思想といった大規模な社会現象についても、それがふつうの人びとの実践的な活動にどう作用するかに関心を寄せ、グローバルな世界におけるローカルな差異や解釈の違いを探し求める。
文化人類学はその全体を見る視野と世界の文化や社会へ目配りする俯瞰的視野の広さや多様性に向ける関心、それを持って社会常識を再検証する能力を持つという点、また、現地語を修得しての長期にわたる参与観察という調査手法と、ミクロ的研究がもたらす問題解明へのこだわり、そして厳密な意味での社会現象にとどまらず文化、芸術、個性、認識にまで考察対象を広げる点に特徴がある。

４（１）文化人類学を学ぶ学生が修得すべき目標

人類の社会と文化の多様性を深く理解し、多様性に対する感受性を養うこと。その広い視野と複雑さを認め、経験の豊かさとそこから得られる潜在力を認識すること。
以上の、技能や知識を身に付けた文化人類学を学んだ学生は、近年重視されるグローバル人材としての能力を身に付けているということができる。彼らはことばだけに限らないコミュニケ

ーション・スキルとして、グローバリゼーションの現状と異文化間コミュニケーションの在り方を把握し、理解する力を備えているのである。

４（２）文化人類学を学んだ学生が修得すべき専門的技能

文化的ステレオタイプや自文化中心主義に自覚的になり、文化の異なる人びとと偏見を交えずにつきあえる能力。

６　市民生の涵養をめぐる専門教育と教養教育との関わり

西洋中心主義の見直しや、無視されがちな周辺からの知の意義は、文化人類学が他の学問に先駆けて常日頃強調してきたものである。

文化人類学を学んだ学生は、人類史の長い時系列で物事を考え、五大陸、三太洋の広さから思考することができる。

文化の違いについての敏感さや寛容さを養い、異文化へのアプローチの仕方を指導することのできる文化人類学は、現代のグローバル人材に求められている多文化・異文化に対処する能力を養うための導入として、これまでも役立ってきている。ひとつの外国語を履修してそのことばの話されている外国へ、人々と深いコミュニケーションを図り、異文化をより深く理解するために出発する学生に、一般的な異文化とのつきあい方を指導するためには、文化人類学が必要である。

７　教員養成等と文化人類学

高校教育において世界各地域の風土、生活様式、人々の生き方や考え方などの学修を通じて異文化を理解することができる資質を養うことは重要である。異文化理解は今後ますます必要とされる能力であり、世界諸民族の言語、社会組織、宗教、生活様式などについて学ぶ「文化人類学」を、高校の教員を志す者は学んでおくべきではなかろうか。

Ⅱ　以上を踏まえて文化人類学をアピールするとしたら

①　フィールドワークを通じたローカルな生活実態からのグローバル化社会の把握

人類学者は、本国とフィールドを往復することで、本国・フィールド双方のローカルな生活現場がグローバルにつながっていることを身をもって体験している。「グローバル社会」は国家間の外交関係あるいは国際企業の世界展開というだけではなく、それぞれのローカルな生活現場がさまざまなモノ（輸出入品、移民・出稼ぎ、観光などによるモノ・人の出入り）や関係（国家政策、市場など）を通じてぶら下がる傘のようなものであることを、具体的経験から描き出すことができる。

②通文化比較による人類文化社会の共通性と差異の把握

人類学者は、フィールドワークを通じて、文化の共通性と違いを日常の生活感覚レベルで体験している。通俗的な比較文化本の描くようなステレオタイプ化された対比ではなく、日常生活のふとしたはずみに感知されるような文化の違いを、具体的に示すことができる。またそれほど苦もなく日常生活を送れるということから、文化の共通性についても多くを語ることができる。異文化についてのそうした語りは、マニュアル的な「異文化理解」を刷新することができるだけでなく、文化対立や民族紛争を考える上で、国際関係や経済問題とは別の、日常生活に発する視点と考える糸口を提供することができる。

③文化相対主義の支持と自文化中心主義の自省

人類学者はフィールドワークの経験から、つねに相対的に考える姿勢を身につけている。文化相対主義は、公平に見てやるという上から目線でなく、生きて帰れるかという状況で身に付けた実践的姿勢であり、自らの自文化中心主義を反省させられる経験は枚挙にいとまがない。それゆえ人類学者は自文化中心主義に敏感であり、異文化間コミュニケーションの難しさのひとつにより自覚的である。

Ⅲ　誰にどうやってアピールしたらいいのか

＊この部分あまりいいアイデアが湧きません

【対象】

大学生：シラバス等

高校生：

小中学生：

小中高の先生：

一般人：

【手段】

本：

cf. 民博編集の『フィールドワーク選書』（刊行中）

テキスト：

cf. 小中学生向けのフィールドワーク・テキストができないか？

公開講座：

公開シンポジウム：